江苏工业学院图书馆
藏书章

田久保英夫

福武書店

上

田久保英夫（たくぼ・ひでお）
一九二八年、東京に生まれる。慶応義塾大学仏文科卒。六九年、「深い河」で芥川賞、七六年、「髪の環」で毎日出版文化賞、七八年、「触媒」で芸術選奨文部大臣賞、八五年、「辻火」で川端康成文学賞、「海図」で読売文学賞をそれぞれ受賞する。著書として他に「薔薇の眠り」「女人祭」「雨飾り」「青を風に晒して」「氷夢」などがある。

しらぬひ（上）

一九九〇年六月一五日　第一刷印刷
一九九〇年六月二〇日　第一刷発行

著者　田久保英夫
発行者　福武總一郎
発行所　株式会社　福武書店
東京都千代田区九段南二―三―二八
〒〇二一　電話（〇三）二三〇―二一三一
振替口座（東京）六―一〇五〇九七
本文印刷　大日本印刷
製本　小泉製本
平版印刷　栗田印刷
（落・乱丁本はお取替えいたします）
（定価は函に表示してあります）

©H.Takubo 1990
Printed in Japan

ISBN4-8288-2339-5 C0093
NDC913 194 300p

しらぬひ（上）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

1

その木洩れ日の下で、律子は息をつめ、眉ねを微かにふるわせるようにして、空を見あげた。楠の葉ごしに、春の柔かな陽の光が斑らに顔に射し、一瞬その眸の動きはよくわかった。どこか軀の髄の方に、小さな傷みが走ったようでもある。そうでなければ、不意に遠い虚空に、あざやかな記憶、それも何かしら厭な記憶がかすめ過ぎたようでもある。

河見が車止めの木杭の間をぬけ、石だたみを近づいた時も、律子は気づかなかった。きつく二重に刻みこんだ眸をゆっくり返して、律子は立ったまま俯いた。彼はそこに奇妙に遥かな距離を感じて、この女がまたどこかへ消えてしまうのではないか、と不安になった。

「すこし冷えるね。」

彼は相手を驚かさないように声をかけた。

すると、律子の石の上にむけた視線が、かたく凝らしたままこっちへ注がれた。やっとその顔

つきが、人間をみとめて和むまで時間がかかった。
「どうした、凄い眼つきだ。」彼が訊くと、
「あの木の上に……。」
律子は楠のこずえを指した。
「鳥の群れがいたのよ。椋鳥じゃないの？」
「椋鳥。」
河見はそこへ眼をやったが、その鳥の影は見えない。欅の黒い網目のような枝に緑が芽ぶいて、日光の雫をため、その蔭からひばりの声がする。
「椋鳥はきらいなの。貪欲で群れをつくって、柿の実でも何でも食べちゃうし、雨戸に卵を産みつけるし。」
それはこれから行く自分が育った家のことなのか、去年までいた地方の町のことなのか、わからない。
しかし、彼はそれを訊く気もなく、裏口の方へ歩き出す律子とならんで、その歩度に合せた。律子の母親や兄のいる家は、この元宮家の屋敷だった公園の裏手だと、聞いている。
三月初めなのに、風はつめたい。小道はところどころ、葉蘭のしげみの下に淡く水溜りをつくっている。律子はかまわずそれを踏みつけ、墨色のだぶだぶしたスカートを翻して歩く。白いブラウスに、同じ墨色のすこしくたびれた上衣を着ている。女にしては肢が長く、肉づきがうすいので、余計軀に服が馴染んでいない。
彼は横目で、その顔を眺めた。律子は発熱したように顔の皮膚があからむ時と、静脈が透くほど白っぽくなる時があるが、今は白く肌が褪せて見える。そんな顔いろと、ひっそり黙りこんだ

口もとは、これから母親の家へ行く濃い感情や意志を、内へ内へと抑えこんでいるようだ。
河見はそれを見ると、自分のなかにも同じものが乗り移ってくる気がした。いや、この一年近く共同の仕事をして、暮しの時間もかなり一緒にすごし、自分のなかにまで、似た感情や意志が溜りこんでいるとも思える。むしろ、これは本気なのか錯覚なのか、自分のために、今まで会ったこともない律子の母親のところへ、出かけて行くとさえ思えてくる。
公園の裏口をぬけると、高台の坂だった。その中途には褐色やパール色のタイル壁の高層住宅がいくつか並び、これをすぎれば、坂道は燻んだ商店街と、静かな屋敷町にわかれる。
律子は屋敷町の道へ入った。そこは中南米の大使館の丈高い門の鉄柵も見え、数寄屋風の家の石塀から、頭上に椎の枝葉がさしかけてくる。舗道に人影はなく、茶の斑犬が一匹、下水の匂いをあさっている。
つき当りに、森のような木立の伸びた生垣が近づいた時、律子の足は速まった。その眼の表情で、目ざす家が道のかどの古い煉瓦建てだ、と彼にわかった。
門塀もやはり煉瓦で、角型のどっしりした門柱に、「安西」とうき彫りされた銅製の表札が埋めこんである。安西とは律子の苗字だ。
しかし、律子はなぜか歩みを落さずに、そのまま門の前を通りすぎた。つき当りの生垣沿いに、道を右へ曲る。
「どうするんだ。行かないのか？」
彼は思わず訊いたが、律子は黙って前を見て、歩いている。足の速さがすこし落ちてくる。
「いま見たでしょう？　あなたに家を見せにきたんだから。」
律子は落着いた声で言った。

「何を言ってる。あんなに母親に会わなければ、と話してたくせに。あれほど怒ってたくせに。」
「ほんとに会う気なら、電話をかけとかなければ、時間がとれないわよ。あなたがあまり私の過去の家を知りたがるから、きただけ。」
「いや、これは僕自身のことでもある。君のお袋に会うのはとにかく、あの家へ行くつもりで落合ったのに、怖じ気がついたんだな。」
いつの間にか、高台を降りる急坂へ出ていた。片側は雑草の繁茂した空地で、錆びた有刺鉄線が張りめぐらしてある。律子はその丸太の柱に手をかけて立ちどまり、こっちを見た。
「誰にも、あの家と私との間にある時間の切れ目が、わからないのよ。のぞいても、底が見えないほど深いの。それは私が何年も、自分を丸ごとなげ出してつくってきたのに、今どうやってとび越えるの？」
律子は雑草の斜面下に、薄日で煙ったようにひろがる市街を眺めた。その血の気のない横顔は、頬から頤にかけて女くさい柔かな線も見えるが、どこか弱々しい。しかし、彼はそれが曲者で、弱々しさそのものが、細竹のようにしなやかで折れず、貪婪な力もあるのだ、と思った。そういう思いをした経験もあった。
多分それがなければ、二十一の時、一人で家を捨て、七年間も暮していけるはずがない。最初は母親の反対を押しきって、大学生同士、結婚したのがきっかけらしいが、それも家を離れる口実だったのかも知れない。河見自身、雑誌づくりの仕事に律子が入ってきて、まだ十か月で、よく知っていない。以前、北陸の地方新聞社で働いていたというが、詳しいことはわからない。男とそこで同棲していた気配もある。だが、知りたくても話してくれない。
「しかし、もし行かなくても、またむこうから言ってくるよ。心配しているんだろうが、君の友

達を通して。」
彼は以前の不快を思い出して、言った。
「いつも、それを聞いてばかりいられないだろう。気持のいい話ならとにかく。受身ばかりでなくて、いつかこっちから進んで、区切りをつける必要があるんだ。」
「でも、いきなり行って、母がいるかどうかわからないわよ。」
律子は迷うような眼をむけた。
「いいじゃないか。こっちが積極的な考えに変えた、とわかるだけで。」
彼が言うと、律子は無言で、有刺鉄線の前を離れた。それから、もうためらいのない歩みで、坂道を戻って行く。煉瓦塀のかどを曲り、門前にくると、ちょっと彼に視線を送って、表札の下のチャイムのボタンを押した。
門柱の間には、両開きの鉄柵が締っている。その黒い鉄の一本一本は頑丈で、銛のようなかたちに先端が尖っている。河見はそれを見ると、時間の切れ目という律子の言葉を思い起した。なるほど、この柵の内と外では、自分などに理解できない深い暗渠があるのかも知れない。
チャイムを押しても、前庭のむこうの燻んだ洋館からは、なかなか誰も出てこない。ここからその玄関のポーチまで五十歩ぐらいか。芝生の間に秩父青石を敷きつめている。その敷石は左側の車庫にもわかれ、建物と車庫とを仕切って、樅の列が植わっている。
彼はある程度、律子の生家のことは聞いていたが、こんなに広いとは思わなかった。洋館といっても屋根は和風の銅葺きで、煉瓦は淡い褐色の硅石質のものだ。半ばは二階建てになっているが、むろん戦前の建築だろう。彼はその緑青の吹いた屋根の勾配の美しさに、見とれた。
不意に庭の奥の方で、戸がきしむような音がした。塀際に植込みの繁みがあって、見えにくか

ったが、建物の右はしと塀との間に、飛び石が奥へつづいていて、そこにもう一つ、和造りの棟が見える。それだけは現代風のあたらしさだが、やはり外壁は煉瓦の色に合せてある。

思わずその方をうかがうと、袖垣の蔭から、紅色のサロン・エプロンを着た若い女が、小走りにやってきた。しかし一瞬、その途中でこっちを見ると、

「あら、律子姉さま。」と小さく叫んで足をとめ、それから飛び石づたいに駆けてきた。

「どうしてこんなに急に。びっくりする。」

娘はせかせかと鉄柵の錠を外しながら、息をはずませて言った。

「母はいる？」

律子は門を入ると、敏捷に車庫へ眼を走らせて訊いた。

「朝からお出かけですけど……。電話で、連絡してみましょうか。」

娘は乳色の顔をあげ、まだ素直に驚きをのこした眼で律子を見た。

「いいわよ。お嫂(ねえ)さまは？」

「小学校へお迎えに。」

娘は敷石の上を一緒に歩き出そうとするが、律子が立ったままなので、また足をとめた。

「じゃ、淑子とお母さんだけ？」

「母は郷里に不幸があって、週末まで帰ってます。」

律子は初めて気がついたように、彼の方を振りむき、娘をひき合せた。

「淑子よ。家に古くからいる家政婦さんの子だけれど、私の妹と同じなの。」

淑子は彼を、律子の勤めの雇い主と紹介されると、頬にうすく赧みを走らせ、丁寧にお辞儀した。それから自然な動作で、また敷石の上を歩き出したが、今度は律子は黙ってついて行く。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

淑子は同じ青石を張りつめた洋館の車寄せへ、石段を一つ踏んであがり、古いチークの扉をあけた。律子を先に、彼もなかへ入ると、咄嗟に仄暗いホールの上の方から、縞状に日光が射し降してくるのが、眼に入った。ホールは広くないが、ゆるく弧を描いて階段が昇っていて、その踊り場の壁一面の長い窓から、空が見える。窓には銅線で素朴な蔓草の模様が浮いている。

「居間へいらっしゃいます？」

彼の立っているたたきから、ホールの絨毯へ上れるように、淑子はスリッパを二つ揃えると、律子に訊いた。

「こっちがいいわ。」

左手の両開きの扉の方へ、律子は馴れた身のこなしで近づき、ノブを廻した。

そこは応接間らしく、肌色の壁に年輪を経た柱や梁が、ゆったりと調和した二十畳ほどの部屋で、太い木枠の暖炉のまえに、重そうな別珍張りの長椅子や肘掛け椅子が置かれている。装飾らしいものは、百号ほどの点描風の油絵が、壁にかかっているだけだが、河見の見たところ、遠い夢の通い路のようなその絵は悪くない。まん中の大卓に、誰かが書いたメモと二三枚のタイプ文書があるのを、淑子が慌てて手に拾いあげた。

しかし、何より眼をひいたのは、部屋の庭側がすべてガラス扉になって、テラスごしに、樹々の緑の反射が室内を照らしていることだ。その庭はあまり広くないが、石の蹲踞（つくばい）もあり、欅や楓、黄楊などが濃い影を投げている。テラスには陽に褪せた籐の卓子と、肘掛け椅子が二脚据えてある。

どうやら、律子はその籐椅子が目あてだったらしく、勢いよくガラス扉をあけると、テラスへ出てそこへ腰かけた。河見にも、かけろと眼で誘う。

「淑子、すっかり大人になったわね。」
律子は、部屋へ戻ろうとする娘に言った。
「もう成人式すぎた？」
「とっくです、二年前……。」
淑子は小声でそうこたえると、眼のなかに羞恥に似た光を見せて、扉口を出て行った。
彼はその娘が、表情にいろいろなものを直截に出す女だ、と思った。黒目が派手な感じをあたえる顔も、小柄なからだも、まだ初々しい。しかし、これほどの素直さは、かえって少し異様な気も起させる。
「あの子は、母親と一緒にずっと家にいるから、幼馴染みなの。」
律子は彼に言った。
「私が高校生の頃、同じ部屋に暮したこともあったわ。」
「君の部屋はどこだったの？」
「二階のあの南側よ。」
律子は肩をひねって、テラス沿いに芝生のむこうを指した。
「兄が結婚して、階下へ移ったけど。」
この洋館は南側へ、鉤形につき出していて、二階にヴェランダの手すりが見える。その洗濯竿に、バスタオルが何枚か干され、赤や黄で塗った子供の木馬、錆びた鳥籠などが、片隅に抛り出されている。このひっそりと整った家のなかで、そこだけが雑然とした暮しの臭いがする。今も兄夫婦が使っているのだろう。
「あの頃、兄たちに男の子が生れたばかりなのに、もう小学校へ行ってるなんて。」

律子はまったく懐かしがる風情はなく、乾いた声で言った。
彼はその兄や家族について、わずかに律子に聞いたことを思い出そうとした。たしか兄は国立大学を出て、通産省のキャリアになっているとのことだ。五十代で病死した父親も、やはり経済関係の省にいて、政治家になった。そういう血筋は祖父からつづいているから、律子の母親は兄もその世界へ出そうとして、懸命に働いているらしい。母は夫の死後、和服の生地を、デパートなどへ卸す会社をやっているという……。
彼は律子が、こんな何の不自由もなさそうな家庭にいて、なぜ家を出たのだろうか、と考えた。それは当の肉親以外にわからない気がするし、また反対に他人の自分の方が、しだいにはっきりわかり始めている気もする。
「電話を、会社へかけてみましょうか。」
淑子が紅茶を盆にのせてきて、また訊いた。
「いいのよ。今日はこれで帰ります。」
律子は紅茶の茶碗に軽く口をつけると、彼に眼で合図した。
「お嫂さまがお帰りになると、びっくりさせるし。」
「いえ。私立の学校で、いつも車で迎えにいらっしゃるから、簡単に帰れません。」
淑子の眼に、ひきとめたそうな感情の色が動いた。
「淑子、綺麗になったわよ。」
律子は立ちあがると、娘のエプロンの胸を指で突いた。
「何をしてるの？　大学へ行ってないの？」
「いいえ。家にいてお手伝いして。英会話とお茶を習いに行ってます。」

淑子は相手の指を片掌で握って、下へ降した。まるで長い髪がもつれ合うような、女同士の色濃い接触の匂いがした。
そのまま律子が部屋に入り、ホールへ出るので、彼もあとについて歩いた。
テラスも洋間もホールも、この家には不思議に居心地のいい、静かさがあった。秩序とも親密さとも違う。言い知れず家の底の方から、漂ってくる静かな翳り。ちょうど檜の樹林へ奥深く入った時、四方からとり包んでくる薄闇と樹の香り。これはどこからくるのか、と河見は思った。律子はこんななかで生れ、育ったのか。
「また、お見えになります？」
前庭から門の外へ、淑子は送りに出ながら訊いた。
「たぶんね。」
律子は頷くと、未練げもなく道路を歩き出した。
彼もならんで歩きながら、背後に淑子の視線を感じた。自分たち二人のことを、娘はどう思っているか、と考えた。母親がいなくて、自分が話す筈の用も足りなかったから、ただ律子と一緒に、他人の家へ押しかけた妙な男に、見えるに違いない。あるいはそれほど、律子と親しい男に見えるだろうか。
「君のお袋がいなくて、心残りだね。」河見が言うと、
「いえ、いいの。」
律子はつよく首を振って、さっきの高台を降りる急坂の方へ曲った。
「どうせ私がきたと聞けば、またむこうから何か言ってくるわ。瀬川さんを通して。」
その通りだろう、と彼は思った。瀬川というのは、律子の大学時代の女友達の名だ。たしかに

母親は昨年、律子が帰京して働く場所を知り、一度家へ戻るように、という言づてをしてきた。それを無視してしまうと、今度は小切手を托してきた。しかも今の勤め先は、自分の調べたところ不安定だから、もっといい場所を世話すると、伝えてきた。

一種の母親の愛情に違いない。しかし、彼自身も腹をたてた。直接会いもせず、その仕事場を見もしないで、なぜそんな中傷ができるのかと。もしそんな言葉が外部に伝われば、実際にこちらの信用を損ってしまう……。

さっきも律子のためだけでなく、そうした言い分や感情がつもってきたのだが、今はなぜかそれが力を失ってしまっている。相手に言い出す機会もなかったのに、さほど落胆もしていない。むしろあの家へ行って、よかったと思っている。それが河見自身にも、不可解だった。

彼は律子はどう感じているのかと、横目でその表情をさぐった。しかし、律子は自分の想念に深く沈んでいるらしく、黙々と足を運んでいる。事実、七年ぶりで肉親のいる家へ帰ったのだから、その思いはおそらく他人とは較べられない。

そのせいか律子の顔は、珊瑚色に血の気が射してきている。たまにそんな顔を見ると、彼は発熱したのではないか、と思ってしまう。ふだん、大して色けがないので、妙になまめいて淫らに感じてしまう。

河見はまたこの女と自分との距離が、計れなくなった。ただ編集室に机を並べる同士だ、という気がするし、個人的にひどく深い間柄、という気もする。いつも軀に触っても、拒まれないという感覚もあれば、急に勤めをやめて行っても、驚かないという感覚がある。それはこの女と、まださほど時間がたってないせいか。この女の中に妙に無際限な、とらえがたい情熱を感じるせいか……。

事実、彼はふと、自分が律子と軀の関係を持った、と錯覚することがあった。しかし、それは深夜の校了をおえて、タクシーで律子のアパートへ送った時、二間きりの部屋へ上って珈琲を飲み、唇や肩に触れただけだ。その時、律子があまりに拒まず、ただじっと顔を見ているので、何となく気味悪くなり、手をとめてしまった。その時も、しだいに肌のうちから熱が滲み出てきて、あとで思い起すと、ひどくなまめいた感触がした。

「どうするんだ。」

河見は編集室に戻る用があるため、律子に訊いた。この坂を降りると、別の方向の地下鉄口に出てしまう。

「夕方、カットができるはずなんです。」

律子はまだ自分の想念から、醒めきらない眼をあげた。

「それが早ければ持って戻りますし、遅くなればうちへ帰ります。」

「そう。じゃ、僕は道が逆だから。」

彼が言って足をとめると、律子は頷き、すぐ坂道を下りはじめた。この女はいつもこうで、多分もう今日は当てにならない、と河見は思った。

雑草の斜面のむこうに、午後の遅い空がひろがり、鈍く糜爛したような光を、高層のビルや鉄塔へ降りそそぐ。そこから風が渡って、律子の髪と、だぶだぶしたスカートを翻す。

彼はそのうしろ姿に、さっきの家とどこか不似合いな、漂泊の影を感じた。

夕陽の残照が、皇居の森を照らしている。西の方角はこの窓の斜め後方にあたるから、落日は

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.